

## 崩れる境界線：教養小説の視座から見る芥川龍之介『杜子春』

桂 嘉雨

本研究は芥川龍之介の短編小説『杜子春』を対象とし、教養小説の視座から新たな読み方を試みる。テキスト分析を通じて、『杜子春』には明治・大正期の教養小説を想起させる要素が含まれていることが明らかになった。例えば、眩いばかりの国際的な都会風景の中で自殺願望を抱く青年が佇んでいる冒頭シーンは、明治後期から大正期にかけての藤村操をはじめとするエリート学生の自殺事件を連想させる。さらに、高度な思索性と主体性を持つ男性主人公＝杜子春が表象する自己教育的かつ存在主義的な色彩は、同時代の教養小説の形式および主題的特徴と呼応している。しかし、と同時に、『杜子春』はその教養小説的パターンから逸脱する、あるいはそれを超越する部分も含まれている。小説の優れた虚構性とストーリー性や、主人公が現存する社会秩序に回収されることも、隠居生活への逃避行もない結末はその証拠として挙げられる。杜子春が人間性の闇でアイデンティティー危機に陥ることがきっかけに自己発見の旅に誘われ、最終的には人間らしい、正直な暮らしをすると決意する一方、道教の神＝呂洞賓を思わせる天界の存在である鉄冠子は、杜子春が自分の人間性を保つために、仙人になる機会を自ら放棄することを目撃し、彼が抱えた凡人と仙人、死と不死に対する二元的な認識に亀裂が生じる。鈴木三重吉が主催した児童雑誌『赤い鳥』には子供と大人を二項対立的に捉える傾向があり、芥川はその童心至上主義的プロジェクトを支持する文学者の一人として寄稿し続けた。にもかかわらず、彼の寄稿、特に『杜子春』において、教養小説の枠組みとして機能すべき未熟な主人公と経験豊かな指導者の間にある境界線が、杜子春と鉄冠子の関係性により曖昧になっている。その力関係の流動性は、子供と大人という二項対立的構造およびその裏にある近代的思考、つまり直線的な発展や逆転不可能な成長を覆るポテンシャルを示していると思われる。

## 崩れる境界線：教養小説の視座から見る芥川龍之介「杜子春」

ハーバード大学 桂 嘉雨

### はじめに

1920年に鈴木三重吉が主催した月刊児童雑誌『赤い鳥』に掲載された芥川龍之介の短編小説「杜子春」をめぐる、日本、中国、英語圏における研究が盛んでおり、その中で、「杜子春」のインド語、中国語、そして日本語版のテキスト間相互関連性

(intertextuality) (村松 1965; Reed 2009) や、芥川文学の系譜における位置付け (中村 1954; 山下 1984)、メディア学の視座から「杜子春」とその媒体である『赤い鳥』との力関係を見出すもの (山下 1983&1984)、作中人物像の角度から「杜子春」の政治性を抽出するもの (劉 2018) などといった先行研究が代表例として挙げられる。にもかかわらず、「杜子春」における前景化された主人公の多段階式成長や、「人間性」に対する哲学的な問いかけ、「旅」の要素などは明治・大正期の教養小説を想起させ、「杜子春」とそのジャンルの関係性には論じられるものがあると思われる。

### 一、「杜子春」における教養小説的響き

これまでの先行研究を見てみれば、「杜子春」を教養小説として捉えるものはほとんどないが、主人公の「成長」というテーマや、そこから現れた芥川の児童観を議論する先行研究 (山下 1984; 劉 2018) はある。それはつまり、「杜子春」が教養小説を想起させる要素を含んでいることを間接的に裏付けている。その教養小説的響きを、舞台設定、キャラクター作り、プロット、そして主題から分析していきたい。

まず、「杜子春」の冒頭部分では、物語の舞台あるいは時空間に注目したい。「杜子春」の原型である中国の唐伝奇「杜子春」では、主人公の杜子春が「周や隋の時代あたり」の人物として描かれ、物語は「冬の長安」に設定されている一方、芥川版の「杜子春」では、主人公が「唐の時代」におけるとある「春の日」に「洛陽」の西門に寄りかかっている場面から始まる。実は、初出の『赤い鳥』版 (1920) も「長安」を舞台にしていたが、1921年に『夜来の花』という短編集に再録された際に「洛陽」に置き換え、それが全ての再版の原型となった (劉 2018: 199)。変更された時間 (季節と時代) と空間は一見すると恣意的に見えるが、劉 (2018) は、平安時代に中国が模範の対象として尊敬された時、京都において、「長安」と名付けられた地域は低く湿った土地だったのに対し、「洛陽」と名付けられた地域は繁栄し、京都の同義語にもなっていたため、「洛陽」という地名は、繁盛した国際都市的な雰囲気呼び起こすことができると同時に、近代日本の読者が持つ「古代中国の首都」というイメージに相応しいと述べている。

それは芥川が唐伝奇「杜子春」を翻案・再解釈した際に使った地方化 (localization) 戦略と捉えてもいいが、教養小説でよく見られる舞台設定との関連性を見逃してはならない。このジャンルの代表作として認識される作品、例えば夏目漱石の『三四郎』

(1908) や森鷗外の『青年』(1910-1911) において、男性主人公の自己発見と精神的成長の旅は、たいてい「上京」という決断から始まる。田舎から出てきた主人公は、眩いばかりの都会生活から受ける衝撃に直面し、アイデンティティの危機を経て、多様な背景を持つ人々に出会い、一つ以上の恋愛関係を経験し、人生の意味や目標を見つけるた

めに努める。「周と隋の間の時代」を「唐の時代」に、「長安」を「洛陽」に書き換えた芥川の冒頭の改稿は、主人公の内面の葛藤（近代化されていない自我）と外部の都市表象（近代化された、疎外感を感じる都市）との鋭い対比が見られる日本明治・大正期の教養小説の舞台設定と一致している。さらに、煩悶と自殺願望が容易に窺える杜子春に対する言語描写も、教養小説ブームの引き金になったエリート学生自殺事件の代表人物である藤村操と彼の遺言を想起させる。

（「旅」の要素、自己教育的かつ存在主義的な結末）

## 二、広げられた「教養小説」のテリトリー

藤村の自殺事件を彷彿とさせる冒頭のシーン、男性主人公の持つ高度な思索性と主体性、自己教育的かつ存在主義的な結末、そして「旅」の要素はすべて、「杜子春」を教養小説の視座から解釈できる可能性を物語っている。しかし、「杜子春」にはまた、これまでの先行研究により抽出された日本明治・大正期における教養小説の枠組に回収できない部分が含まれている。陳（2020）は、その時期の教養小説は素直な自伝的な書き方が特徴的である一方、首尾一貫したストーリーを構築することにあまり心掛けていないと論じている。「杜子春」の虚構性と統一の取れたプロットは、唐伝奇「杜子春」にももらった素材を抜きに達成できるかどうかは議論の余地があるにもかかわらず、陳の観点が収めきれない部分は明らかになっている。志賀直哉の『暗夜行路』（1921-1937）や宮本百合子の『信子』（1924-1926）など、「杜子春」とほぼ同時代の教養小説が私小説的性格を帯びていることを踏まえ、「杜子春」の教養小説的読解は、このジャンルに潜むさらなる可能性を示すことができるだろう。

さらに、その正体を徐々に読者に示していく仙人である鉄冠子のイメージは、通常の教養小説における「指導者」と異なる部分がある。張（2015）は、アメリカの教養小説において、主人公の側には常に精神的な指導を行う人物を「指導者」と名付け、主人公の精神的成長に直接的または間接的な影響を及ぼしていると主張している。「指導者」と「被指導者」という人物上の対概念は、日本の明治・大正期における教養小説にも当てはまっている。「指導者」は基本、人生経験豊かで年上の男性人物が務めており、それと対照的に、「被指導者」は未熟な主人公が演じる。「指導者」は常に、その人生経験や知識面により上から下へという一方的な影響を主人公に与え、家父長的なイメージに似ている。島崎藤村の『破戒』（1906）に登場する、被差別民解放運動の活動家である猪子蓮太郎などは、その時期における教養小説でよく見かける「指導者」の代表人物である。

そういう意味で、鉄冠子と杜子春の関係は「指導者-被指導者」として認識されがちなかもしれないが、鉄冠子のイメージはすでに完成している、静的なものではなく、杜子春が経験した精神的な「旅」を最初から最後まで見守り、杜子春とのやりとりを行う中、二人の関係性には一連の変化が起きるという点は、「指導者-被指導者」という教養小説的人物関係と区別している。その関係性について、最初に注目すべきところは、杜子春は願ひ通りに鉄冠子の弟子になり、二人は峨眉山に向かう途中、鉄冠子が詠んだ詩にある。

朝遊北越暮蒼梧，  
朝に北海に遊び、暮  
には蒼梧。

袖里青蛇胆氣粗。  
袖裏の青蛇、胆氣粗  
なり。

三入岳陽人不識，  
三たび岳陽に入れど  
も、人識らず。  
朗吟飛過洞庭湖。  
朗吟して、飛過す洞  
庭湖。

(Lü Dongbin, *Complete  
Tang Poems*) (Akutagawa, *Toshishun*)

芥川が「杜子春」（初出）のあとがきで告白したように、その歌は自作ではなく、道教の仙人＝呂洞賓が作者とされているものである。しかし、それは劉（2018）が紹介した、呂洞賓の「三入岳陽人不識」という伝説から伝わる、仙人になる機会に無関心な人間たちに対する呂洞賓の失望と対照的に、芥川の「杜子春」では、呂洞賓の分身に見える人物＝鉄冠子は自ら弟子入りを申し込んだ杜子春に対して明らかに満足を感じている。つまり、鉄冠子は「三たび岳陽に入れども、人識らず」の状況を回避できると同時に、仙人であることおよび不老不死の尊さを理解できる人間＝杜子春に出会ったことに喜びを感じていると読み替えることも可能であろう。

だが、そのような心境と二人の関係性は、杜子春が沈黙の戒めを破り、仙人になることに失敗した後に変化が起きる。唐伝奇版のように、杜子春をなり損ない扱いし、がっかりするのではなく、鉄冠子は杜子春の選択を肯定し、もしそうでなければ、自分はその場で杜子春を殺すつもりでいたと述べている。そのような考え方は、その歌を通じて見えてきた呂洞賓のように、家父長的な目線で人間を見下ろし、不老不死を一方的に人間に押し付ける姿勢とは根本的に異なっている。

### 三、崩れる境界線

杜子春が仙人になる直前、不老不死より人間性を保つことを選んだと目撃した鉄冠子は、前述の詩および呂洞賓にまつわる伝説から読み取れた人間性あるいは人間の有限性を軽んじ、不老不死の超越性を尊ぶ態度と異なる一面を示している。もし杜子春が黙っていたら、鉄冠子は本当に杜子春を殺すつもりだったのか、それともそれがただ彼の心境の変化を表現するための誇張なのかは読者にはわからないが、「成長」したのは人間である杜子春だけでなく、仙人の鉄冠子も同様であることは言えよう。それはつまり、明治・大正期の教養小説によく見かける人物関係、「経験豊かな指導者」と「未熟な被指導者」およびその二人の指導関係の逆転不可能性は、芥川の「杜子春」で曖昧になっている。二人とも「指導」と「成長」の主体であり、施した影響も相互的になっている。さらに一步踏み込めば、二人の主要人物が影響を与え合うことで、読者に「死＝有限性」と「不死＝超越性」の境だけでなく、「子供」と「大人」の境についても再考させるだろう。芥川は鈴木三重吉が『赤い鳥』に託した志およびその児童観を支える文学者の一人ではあったが（武藤 2019: 43）、「杜子春」を教養小説の視座から見ることで、『赤い鳥』

に掲載された芥川の短編小説は、鈴木「童心主義」から生まれた「子供性」と「大人性」という二項対立的な認識を相対化し、さらにその裏にある近代的思考、つまり直線的な発展や逆転不可能な成長を覆るポテンシャルも示していると考えられる。

## おわりに

本発表は芥川龍之介の短編小説「杜子春」を対象とし、教養小説の視座から新たな読み方を試みる。テキスト分析を通して、「杜子春」には明治・大正期の教養小説を想起させる要素が含まれていることが明らかになった。しかし、「杜子春」がその教養小説的パターンから逸脱する部分も同時に読み取れ、小説の虚構性および優れたストーリー性や、「旅」の要素、高度な思索性を持つ男性主人公、自己教育的かつ存在主義的な結末はその証拠として挙げられる。杜子春が人間性の闇でアイデンティティの危機に陥ることがきっかけに自己発見の旅に誘われ、最終的には人間らしい、正直な暮らしをしようと決意する一方、道教の神＝呂洞賓を思わせる仙人である鉄冠子は、杜子春が自分の人間性を保つために、仙人になる機会を自ら放棄することを目撃することにより、彼が抱えた死と不死、人間の有限性と神明の超越性という二項対立的な認識に亀裂が生じる。「杜子春」を教養小説の視座から読み直すことで、「未熟な被指導者」と「経験豊かな指導者」という教養小説的人物関係の境も曖昧になっている。「杜子春」の初出誌＝児童雑誌『赤い鳥』の主催者である鈴木三重吉の児童観は子供と大人を二項対立的に捉える傾向があり、それは明治・大正期の教養小説における「指導者-被指導者」の枠組みにも合致している。芥川は鈴木「童心至上主義」のプロジェクトを支持する文学者の一人として寄稿し続けたにもかかわらず、「杜子春」においては、複数の構造主義的な対概念、つまり死と不死、人間の有限性と神明の超越性、被指導者と指導者、そして子供と大人の間にある境界線が相対化されていると同時に、その裏にある近代的思考、つまり発展の直線性を覆す可能性を示していると思われる。

## 参考文献

- 武藤 清吾. (2019). 『赤い鳥』とその時代. フランス文学(32), 42-51.
- Carrie Reed. (2009). Parallel Worlds, Stretched Time, and Illusory Reality: The Tang Tale "Du Zichun." *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 69(2), 309-342.
- 陳 婷婷. (2020). 教養主義的呈現與日本成長小説的流變. 安徽師範大學學報（人文社會科學版）48(1), 19-26.
- 伊東 貴之. (1996). 『杜子春』は何処から来たか?—中国文学との比較による新しい読み. 国文学: 解釈と教材の研究 41(5), 66-73.
- 劉 金挙, 王 宗傑. (2018). 「杜子春」におけるキャラクター像及びその「家庭教育」的效果について. 札幌大学総合研究(10), 187-204.
- 村松 定孝. (1965). 唐代小説「杜子春伝」と芥川の童話「杜子春」の発想の相違点. 比較文学(8), 12-19.
- 中村 真一郎. (1954). 芥川龍之介. 東京: 要書房.
- 孫 勝忠. (2014). 成長小説的縁起及概念之爭. 山東外語教學(1), 73-79.
- 山下 明. (1983). 「赤い鳥」と芥川. 芥川龍之介手帖. 東京: みずち書房.
- . (1984). 芥川と児童文学. 文学と教育(127), 19-27.
- 張 碩. (2015). 当代美国成長小説引路人形象研究. 東北師範大学碩士學位論文.